

音楽と関わって生きる

音楽家への聞き取り調査からの示唆

立教大学 社会情報教育研究センター 助教 高橋 かおり

1. 『音楽で生きる方法』ができるまで

現代社会において人々はなぜ芸術活動を行うのか、そしてなぜ行えるのか。

筆者はそのような関心から芸術に関わる人たちへの聞き取り調査とフィールドワークを続けてきた。芸術を続けているのは一流のプロにとどまらない。アマチュア活動やこれからプロになりたい人、教職や技術職、マネジメント職に関わる人も含まれる。ある人が芸術活動が続けられる理由は単なる巧拙だけではなく、周囲との関係や環境からの影響と、それらを踏まえた本人の動機付けや芸術への意味付けが関わっている。分野ごとの課題や特色もあるものの、これまで演劇、美術、音楽とそれぞれの分野の方々に話を聞いてくるなかで、比較するからこそ強調すべき芸術ならではの状況や特色もある。芸術に関わる方法やキャリアはモデルケース通りに行く人はほとんどおらず、みなどこかで挫折や困難に直面する。だからこそそれを乗り越える工夫がその人の芸術と関わる軌跡になる。

卒業論文で学生演劇、修士論文で若手美術作家のアートプロジェクトを研究対象とした筆者は、博士後期課程に進学した後、「演劇、美術ときたら音楽だろう」という軽い気持ちでアマチュアオーケストラの演奏家に聞き取り調査を行っていた（高橋 2021）。音楽、しかもオーケストラやクラシック音楽に全く素人の筆者が、苦勞しながらも何とか調査を進め学会発表をしていた中で興味をもって声をかけてくれたのが、のちに共同研究者となる相澤真一さん（上智大学）である。

相澤さんは教育社会学者であると同時に、熱心なクラシック音楽の愛好家であり、自身もアマチュアのサクソプレイヤーであった。2016年にサバティカルでドイツ・ベルリンに滞在した際、ヨーロッパの各地を拠点とする20～30代（当時）の若手演奏家・音楽家たちと出会い、彼らの悩みや事情を聞くにつれ、音楽の現場にいる人たちにも届く研究を計画するようになったという。2017年から始まったこの調査プロジェクトの特徴としては、社会学の研究者のみならず音楽家もメンバーとしていたことにある（相澤ほか 2020:13-14）。1人は現代音楽の研究をしつつ、演奏活動や教育活動を行うチューバ奏者の坂本光太さん（京都女子大学）、もう1人は受験生指導や演奏活動を行う声楽家の輪湖里奈さんである。

インタビューを中心とした調査は相澤・高橋の2名で行い、そこで得た知見や疑問を4人で話し合いつつ、『音楽で生きる方法』（青弓社、2020年）という書籍を出版した。実際に書籍化する際は、聞き取り調査の結果のみならず、音大受験の実際や演奏家の健康についてなど坂本・輪湖それぞれの音楽家自身からの実利的なアドバイスも織り込んだ構成となっている。

それまで俳優や美術作家への聞き取り調査を行ってきた筆者にとって、プロの、あるいはプロを目指す音楽家への調査において最も驚いたのは、10代前半で自身の将来を決めていた人が多くいたことである。とりわけヴァイオリン奏者においては幼いころから「音楽の道以外考えられなかった」という声が聞かれた⁽¹⁾。あるいは他の楽器を専門としていても高校に進学したころには専門的なレッスンを受け始める人が多くいた。高校時代に予備校に通い始める美大進学者や、そもそも大学に進まない人が多い俳優とは大きく異なる。音楽家教育においては「音大に進む」ために個人レッスンを受けることはごく当たり前の事実であり、若い音楽家たちは進学に向けた情報を蒐集する中でその常識を学んでいく。しかし、その常識は時に足枷となり自身を縛ることもある。

2. 部活の功罪——集団の論理と個人の未来

「音がある」という表現を筆者が初めて聞いたのは、アマチュアオーケストラでヴァイオリン奏者をしている女性への聞き取りの時である。彼女は音大進学を目指したものの断念し、一般大学に進学後音楽と関係のない職種に就き、現在もアマチュアオーケストラをいくつか掛け持ちし、趣味として演奏を楽しんでいる。この「音がある」という言葉は、音大受験準備をしつつもオーケストラ部の活動にも熱心に取り組もうとしたときに、当時個人レッスンを受けていた先生から言われた言葉だという。

管楽器奏者・打楽器奏者においては、吹奏楽部での経験がその後の進路決定において大きな要素となる。集団で演奏する楽しさを知り、それを仕事にしたいと考える契機が部活動にはある。しかし、プロの演奏家を目指す中で部活の経験は必ずしも良いことばかりではない。

ソリストとしての演奏と、アンサンブルやオーケストラの一員としての演奏が異なることは、筆者らが行った聞き取り調査でもたびたび聞かれた。例えば、中学や高校進学以前からある程度演奏の実力があつた場合、音楽系の部活の先輩や指導者から声をかけられることがある。しかし、音大進学において部活動に関わることは必ずしもプラスではない。『音楽で生きる方法』には「部活動は、あなたを音楽の専門家にするためには存在していません。あくまで入り口を与えているものです」(相澤ほか 2020:43)という助言もある。自分を見せるための演奏なのか、誰かを引き立たせるための演奏なのかで演奏における役割や振る舞い方が異なる。そのため、音大進学を決めていた演奏家の中にはあえて部活に参加しない選択をした人もいた。

ソロと合奏で演奏の仕方が異なるだけでなく、合奏をメインに音楽活動を行っているとき、自分の技能を磨くことが優先できない場合がある。例えば名門吹奏楽部において役職を引き受けてしまうと、部活のため、合奏のための活動が中心になり、自分の技術を磨くための練習時間が時間を取れないことも

しばしばある（相澤ほか 2020:43-44）。

「課外活動として皆で楽しむ」部活と、「専門とするために研鑽をする」受験準備では、同じ音楽活動や演奏でも、目指すところが異なる。合奏の楽しさではなく、ひたすらに課題曲をさらったり、ソルフェージュや聴音といった専門科目を学んだりすることは、時に退屈である。しかし、それは将来のために必要な訓練なのである。

3. 生き抜くために道を切り開く

みんなで楽しむ部活動での演奏活動と、「トッププレイヤー至上主義社会」（相澤ほか 2020:189）である音大に進学するための受験準備が異なるのと同様に、音大での演奏活動と卒業後に音楽家として生きていくための活動もまた別である。『音楽で生きる方法』を編む中で著者間の共通認識としてあったのは、（あるひとつの）音大での教えや常識が絶対ではない、ということである。別の音大（の大学院）に進学したときに異なる評価を受けた人や、国内の音大と国外の音大の違いを感じる人もいる。あるいは、学外のコンクールやオーディションで思いもかけず評価された人もいた。音楽活動を継続するためには「やりたいこと」だけではなく「求められること」にも目を向ける必要がある。

ここではある打楽器奏者のAさんの例を見ていきたい⁽²⁾。Aさんは、中学・高校と吹奏楽部で活躍したのち音大に進学、その後打楽器と作曲の部門においてそれぞれ国際コンクールで入賞し、その実力を認められた。現在は国内外の各地を行き来しつつ音楽にとどまらず広く芸術やパフォーマンスに関わる活動を展開している。しかし、その道のりはときどきで苦労があり、都度自分のモチベーションと相手の要求のすり合わせを行っていた。

Aさんは日本の音大卒業後、ドイツに留学をした。受験の際オーケストラ奏者のための課程かソロ奏者の課程なのかを選ぶ必要があった。

A：〔ソロをやるのかオーケストラをやるのか悩んで〕やっぱり自分の音楽を育てていくのが1番大事なんじゃないかなというところで、それ〔オーケストラ奏者になることの断念〕は結構悔しかった気持ちもあって、そこに対してはすごく悩んだし、オーケストラの打楽器奏者になることが1番の目標だったのにそれがちょっと碎かれた感じがして、という思いもあって受けたのがその国際コンクールの20XY年のときに。ぐわーっとソロやったときに〔賞を〕満場一致でいただいたときで。

Aさんは受験がうまくいっていないなか、ソロコンクールで賞をもらい、そこでの評価が自分の方向を決めたと話している。自分ではどちらの道が良いか判断をしかね、なかなか先に進めなかった中で、外部から自分の方向を決められることにより、進むべき方向がソロ奏者として定まっていく。音楽活動を続けるためには、自分がどこで何を求められているのかにも敏感になる必要がある。

あるいは、このように選んだ道でも急きょ断たれることもある。ドイツで音大に進学後、Aさんは事

故に遭い、しばらく演奏ができなくなってしまった。どうしたら音楽を続けていけるのかを考えたとき、独学で始めた作曲を「自分で仕事にしてしまおう」と一気に活動を「シフトチェンジ」した。学生時代から音楽に関する仕事は何でも引き受けて収入を得ていたため、Aさんは演奏以外で音楽に関わる複数の方法を知っていた。その中で力を入れ始めたのが作曲であった。作曲をあえて収入源にすることで、「自分のスキルで仕事をしていく」という音楽との新たな関わり方を模索していったのである。

Aさんは、身体的に演奏が困難な時期でも音楽をやめずに続けたいと考えていた。自分の1番の武器である演奏が制限される中で、音楽家のみならず、画家や写真家など他の分野の芸術家から芸術と関わる多様な方法や工夫を学んでいく。音楽を続けつつ生き残る道を探りながら、生活のための経済的基盤を整えていった。

10代のころに音楽と出会い、そこから演奏活動を中心に音楽に向き合ってきたAさんは、演奏を続けることが難しくなったとき、音楽を完全に断念するのではなくどうかして関わり続ける方法を模索した。演奏以外の方法で音楽と関わる回路を持てたことにより、それ以前には出会えなかった人との出会いや、思いもかけないところからの仕事の依頼も来るようになった結果、音楽活動の幅は広がっていった。今後の展望と課題については次のように話していた。

A：〔事故に遭って〕本当にピンチになったので、演奏できなくなったら終わるなど思ったし、逆に言うと演奏ができるからこそそれしか仕事がないという状態も確かに怖いなど思ったので。ある種演奏をばりばりしている人には気づかないようなことも気づけたので、早い段階で。なので、作曲もできるんだったらやってみようみたいな。全力で書いてみようということで認められて。で、その認められて今度は、自分の作品を知ってもらう人にどこまで理解してもらえるかが課題。

自分を表現して知ってもらえる手段が増えたからこそ、認められる段階からより深く理解してもらおう段階に行くことを今後の課題として話していた。他の演奏家や作曲家と差異化しつつ、自分らしい表現をいかに理解してもらうのか。自分の核としていた演奏という芸術実践ができなくなったときそれでも自分らしさをどう再構築するのか。Aさんはインタビューの最後に、自身の肩書で初めに来るのはやはり奏者である、と話していた。この意味について聞き返すと、以前ほど十分に演奏ができない状態でありながら、それでも奏者が1番に来ると話していた。Aさんにとって演奏者であることは原点であり中心なのである。

Aさんの活動の軌跡は、演奏家になることを10代のころから目標にしつつ、その時の状況に応じて音楽との関わり方を変えてきた音楽家の過程である。Aさんは日本の音大ではあまり評価されなかった一方、国際コンクールでの評価が自身のキャリアを決定づけたと話している。音楽に関わることは何でも仕事にする姿勢は演奏家のみ専念する人からすれば邪道かもしれないが、そのことによって結果的に音楽を続けられる。音楽業界において演奏のみで生きようとするのであれば、部活動の経験、あるいは教える仕事などは不要かもしれない。しかし、現代社会において音楽で生きる、あるいは音楽「と」生きるのであれば、様々な立場から音楽に関われることは、活動の幅を広げるだけではなく、困難に直面

した際のリスク回避ともなる。音楽とともに生きる様々な方法の一端を示すことは、社会における音楽の価値を多元化することにもつながるのである。

4. 後押しする言葉と経験の共有

筆者は『音楽で生きる方法』の4名の著者の中で最も音楽と遠い立場から調査や研究を進めてきた。少し離れた立場だからこそ、他の芸術分野に関わる人たちとの共通点が見えてきた部分もあり、書籍においてはジェンダーの問題や謝礼の問題などについても触れることができた（相澤ほか 2020:120-132,162-166）。

音楽が私たちの生活においてより身近になるためには、それに関わっている音楽家の生活の多様性や、それぞれの工夫を知ることその一助となる。書籍刊行後には2回のオンライン座談会を行い、1回目は留学をテーマに、2回目は音大をテーマに、著者たちとコメンテーターを招いての意見交換や、参加者からの質疑応答に答える機会も持った⁽³⁾。参加者からの反応はいずれも良く、とりわけ演奏や研究で現在音楽と関わっているコメンテーターからは「自分が若い頃にこういう本に出会いたかった」という感想ももらった。

『音楽で生きる方法』は、出版後多くの方に手に取ってもらえており、現在は電子書籍でも読めるようになった。また、公立図書館へも多く所蔵してもらったことに感慨を覚えている。この書籍がまだ見ぬ読者にとって音楽で生きる方法を考えるための一助となれば、著者の1人としてこれ以上嬉しいことはない。

註

- (1) ピアニストにも聞き取りをしたものの、書籍の分析には入れていない。
- (2) 2020年1月5日、インタビュー実施。
- (3) 第1回「音楽で生きる……どうやって？」（2021年1月5日／コメンテーター：吉田志門、小泉元宏）、第2回「音大に入った、さあどうする？」（2021年4月29日／コメンテーター：福田萌・南田明美）※敬称略

参考文献

相澤真一・高橋かおり・坂本光太・輪湖里奈、2020『音楽で生きる方法——高校生からの音大受験、留学、仕事と将来』
高橋かおり、2021「それでも舞台に立てる理由——まじめに遊ぶための人間関係と規則」宮入恭平・杉山昂平編『「趣味に生きる」の文化論——シリアスレジャーから考える』ナカニシヤ出版、76-85